公開シンポジウム　和光大学総合文化研究所主催

「シルクロード」は、いま

中央ユーラシアの現在をさぐる

20世紀末、ソ連崩壊により各共和国が独立し、
中国で開放・改革政策が進んだ結果、ユーラシア中央部は大きな変化を遂げた。
「変化」は現在も刻々と進行しているが、その詳細が一般に知られることは少ない。
ヨーロッパとアジアが交差するユーラシア大陸中央部については、
「シルクロード」として遠い歴史のロマンや壮大な自然が取りあげられることはあるものの、
そこに住む人々の暮らしや社会のあり方が現在どのようなものであるかは、
ほとんど知られていないのが実情である。
中央ユーラシアは、
遊牧文化とオアシス文化を基層にイスラーム文化、テュルク文化が中核をなし、
ヨーロッパ（ロシア）文化や中国文化がそれを覆う多様な文化要素からなる世界である。
また歴史的には、シャマニズム・テングリ（天神）信仰、ゾロアスター教、
仏教、キリスト教、イスラームなどが信仰され、
モンゴル帝国とそれを継承した諸ハン国、ティムール帝国などが栄え、
また様々な物品や思想が東西南北の人々の交流によって行き交った地域である。
その一方、現在では、豊富な天然資源に恵まれたエネルギー供給地や
ロシア・中国・イスラーム地域にまたがる地政学的に重要な地域として
大きな注目を浴び、今後日本との関係も深まっていくことが予想される。
2007年12月1日、和光大学総合文化研究所主催公開シンポジウム
「『シルクロード』は、いま――中央ユーラシアの現在をさぐる」が
和光大学総合文化研究所主催で開催された。
シンポジウムでは、
シルクロードや中央ユーラシアという言葉で
とかく一括りにされがちなこの地域が、
実に多様で豊かな歴史と文化をもっていることとともに、
様々な問題を抱えていることが、
第一線の研究者たちから示された。
現地の最新事情を織り交ぜた、
その貴重な報告をここに掲載する。

シンポジウム・コーディネーター：坂井弘紀（所員／表現学部准教授）

2007年12月1日　和光大学J棟301教室

中央ユーラシア